「あなたの信仰があなたを救った」

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　ハバクク書２章１－４節

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　ガラテヤの信徒への手紙２章１５－１６節

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　森島　牧人　牧師

　今日は、１５１７年１０月３１日の宗教改革記念日を憶えての礼拝です。宗教改革と聞くとすぐにマルテｲン・ルターを思いますが、彼一人ではなく同じ考えで行動したツヴィングリやカルヴァンといった人々もいました。彼らが始めた宗教改革の運動は瞬時にヨーロッパ中に広がり、海を越えてイギリスにまで及びます。そのイギリスでは王の個人的な理由による宗教改革という側面があったため、もっとピﾕアーなものをと主張する人々が出現して、ピﾕーリタン運動が誕生することとなります。私共のバプテストも、このピﾕーリタンから出発しています。

しかし、この宗教改革の運動は突然に起こったのではありません。それよりも百年ほど前にも、＜ローマ教皇の権威よりも聖書に従うべき＞と主張した人々が出現してきました。しかし彼らは皆、教会の異端者として抹殺されて行ったのです。しかしそれは、１４世紀末に始まった、ヨーロッパをギリシャ文明の世界に戻そうとするルネサンス運動を背景に、主イエス・キリストを愛するがゆえに、大切な主のお体である教会をあるべき原点に戻すため原典聖書の研究を続けていった人々の存在が、そこにはあったからです。

　そもそもヨーロッパの源泉はギリシャのヘレニズムの世界（二元論）でしたが、そこへ一元論であるヘブライズム（一神教であるユダヤ人やキリスト教）が入って来ます。教皇コンスタンティヌスは、このキリスト教によってヨーロッパを統一しようと考え、ローマ法王を頂上としたピラミッド型の巨大なローマ帝国を造り上げます。それを持続可能にしたのは、キリスト教の中にあった「告解」と「贖宥状」いうシステムでした。

当時のローマ教会では＜信仰だけでなく、善い行いがなければ救われない＞と教えていて、司祭は罪を告白する人々に罪の赦しの宣言と共に果たすべき行いを指示していたのです。聖遺物に触れることを指示された人々は、聖遺物のある方々の教会へ行き、それに触れ、そこで賽銭箱にお金を入れることを繰り返すと、結果必然的に教会には莫大なお金が入る仕組みになっていました。当時聖書はありましたが、貴重な上にラテン語で書かれていて、理解出来るのは宗教関係者や学者などほんの一部の人に限られていました。礼拝もすべてラテン語によって執り行われ、一般の人々には何が語られているのか全く分からなかったのです。そのような中、人々の中にマリア信仰・聖人信仰・聖遺物信仰などが強く生まれていきました。

　またそのような中、サンピエトロ大聖堂の建築事業が始めました。そこでローマ教会が資金調達のため、発行したのが、贖宥状（免罪符）でした。罪を軽くして貰えるとして、人々の信仰心につけこみ、販売したのです。大半が貧しい農民である信徒を救うはずの教会が、なんと、重い教会税の上にさらに免罪符を売り込んで彼らを搾取しているとは・・・ついにルターは立ち上がります。贖宥の効力を明らかにするための「９５箇条の論題」をヴィﾂテンベルグ城に張り出したのです。このルターの行動に、ローマ教会内には激震が走ります。

教会を原点に戻そうと日夜聖書に学んだルターが見つけたのは、信仰によって義と認められるとの真理、宗教改革の原理である「信仰義認」でした。それを明確に表現、今朝読みました聖書のパウロの言葉です。パウロは、「・・・人は律法の実行ではなく、ただイエス・キリストへの信仰によって義とされると知って、わたしたちもキリスト・イエスを信じました。これは、律法の実行ではなく、キリストへの信仰によって義としていただくためでした。・・・」（ガラテヤ２：１５－１６）です。私たちは皆、＜キリストを着る＞ことによって、辛うじて神に義と認められた＜赦された罪人＞なのです。免罪符を買うことで、罪の赦しを得ることができるなどと言うことは、＜神の愛＞を、＜キリストの十字架＞を、無意味にするものだ…と。もはやルターは、我慢出来なかったのです。

　この時ローマ教会に＜プロテスト＞した宗教改革運動の潮流の上にある本教会の一員として、私たちは今、パウロ、アウグスティヌス、ルター、カルヴァンの思いを我がものとし、罪人である私たちが＜主の十字架と復活＞によって、神と共に生きる者とされたことに感謝しながら、これからも生きて行きたいと思います。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（説教要約　羽入田悦子）